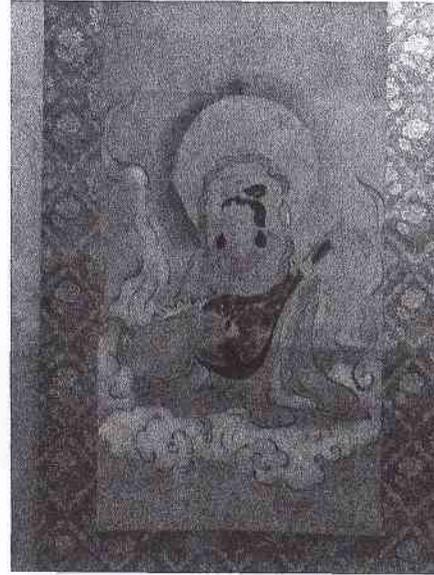


伝え伝わる替女唄の心―伝統ある替女唄と次の世代に―



↑替女の守り本尊 弁天様

時平成三十年一月二十日(土)

午後一時半

会場 アオーレ長岡

市民交流ホールA

出演 越後・替女唄葛の葉会

恵和めぐみキッズランド(園児)

主催 替女唄ネットワーク

0258・468054

### 趣旨

目の不自由な女旅芸人替女は各地を旅しつつ替女唄を唄い継いできた。

長岡替女のルーツは藩主牧野氏の息女で目が不自由なため、山本家に養女に遣わされた娘があり、山本家はその血筋を引くといわれ、替女頭山本、ゴイの先祖と言ひ伝えている。その山本ゴイが中心となって伝えた替女唄を次の世代に伝えたい

## プログラム

3

十三時三十分 開会

十三時四十分 御条目奉誦 唯敬寺三条住職

十四時 京唄 「桜づくし」 横川恵子・金川真美子

三味線をそろえて弁天様に奉納した。地唄とも呼ばれ、山本ゴイとオモダチの師匠や 師連中が四・五人が紋付姿で唄った。長唄の古曲である京唄二曲のうちの一曲。桜咲く季節に妙音講が開かれたので、桜にちなむ唄となっている。

十四時二十分 門付け唄「岩室くずし」須藤鈴子・室橋光枝

長岡警女が地元の中越地方を旅するときに歌った門付け専用

の唄。男女相愛の情を七七七五の口語文で表わした都々逸風の唄。三味線の弦をゆるめ、ジャンコジャンコジャンコと低音の調弦で早めて歌う。文句の中にイヨという合いの手が入るのでイヨ節と称する人もいた。最後の警女金子セキさんと中静ミサオさんは、民謡をこの曲節に合わせて門付けに歌うこともした。

十四時二十五分 警女唄のお稽古「三河万歳」 金川真美子・恵和めぐみキッズランド園児

この唄は太夫と才蔵が掛合いで軽快に唄うもの。現在の漫才の原型

十四時五十分 祭文松坂「赤垣源蔵いとまごいの段」室橋光枝・須藤鈴子

赤穂浪士赤垣源蔵は、討ち入りが決まったので、別れの盃をかわそうと貧乏徳利をさげて兄を訪ねるが、兄は留守。兄嫁は病

4

気を理由にして顔を出さない。源蔵は兄の着物を出してもらい、兄に見立て別れの盃をかわし、会わずにて帰ってゆく。

十五時二十分 民謡替え歌「伊勢音頭くずし」室橋光枝・須藤鈴子・

横川恵子・金川真美子

伊勢音頭は、三重県伊勢地方で生まれた民謡の総称。宇治山田市の古市の盆踊り唄や川崎音頭、農村の祝儀唄が母胎といわれるが、古市の遊郭で歌われ、文化（1804〜14）頃から有名になった。伊勢神宮に詣でた人たちのために神宮中心に歌われたものもあり、瞽女もよく歌った。旅の宿へ泊めてもらったお礼に「朝立ちの唄」として歌う瞽女が多かった。

十五時三十分 閉会

長岡瞽女の由来

「長岡瞽女」は、かつて中越地方一帯から下越に掛けて、分散、居住していた瞽女の仲間です。組織の本部支配所が長岡にあつたので、そのように呼ばれていました。明治のころには、四〇〇人以上の瞽女があり、日本最大の瞽女集団を形成しました。県内は中・下越地方を、県外は東北地方の奥深くまで長い旅を続け、瞽女唄の語り物や歌い物を田舎の人達に送り届け、大いに喜ばれました。

一派を統率する瞽女頭は代々「山本ゴイ」を襲名し、大工町（現、長岡市日赤町一丁目）に家屋敷を構え、通称「瞽女屋」といわれ、長岡瞽女の集会所、唄の稽古所であり、旅の

疲れを癒す休息所にもなっていました。

瞽女たちが芸の守り本尊をお祭りする集会を「妙音講」といいます。瞽女屋は、その本尊弁天様を祀っていたので、「弁天講」といわれていました。しかし、長岡瞽女の妙音講は、瞽女屋山本家でおこなわれていましたので、山本ゴイの先祖を供養する法会も併せて行われました。

山本ゴイの先祖は、長岡藩主牧野氏の息女で照姫と称し、生来盲目のため、家老の山本家へ親知らずの養女に遣わされ、成長して元禄（一六八八〜一七〇四）の末に柳原へ分家に出たと伝えられています。享保十年（一七二五）より、古志・三島・刈羽・魚沼・頸城五郡内の牧野家領や預り所の村々の瞽女頭とし、通称を「山本ゴイ」と定めたということです。瞽女屋は享保十三年に大工町裏に移りますが、妙音講は旧暦三月七日に一派の瞽女全員を集めて催されました。この日は照姫の命日だという言い伝えがありますが、明治時代のいつの頃か、新暦が採用されて、四月十七日となりました。たとえ、遠くへ旅に出て

いようと、前日までには帰ってきて、この妙音講に参加することを義務づけられていました。

瞽女屋の敷地は二八五坪あったといえます。建物は明治元年の戊辰長岡戦争で焼失しましたが、まもなく再建されたようです。二階建ての大きな家で、一階の奥座敷には正面に壇を納め、床の間に弁天様の掛け軸を掛けて祀っていました。

当日は、部屋部屋を開け放ち、みんなが参集するなか、山本家菩提寺の唯敬寺えいきょうじの住職を招いて仏壇にお経を上げてもらい、そのあと、「瞽女御条目」を誦んでもらいます。瞽女はみな頭を下げて聞いたものです。弟子瞽女は師匠について芸を習いますが、二一年の年季を勤めると一人前となり、出世します。しかし、芸の道は厳しいものです。御条目奉誦読のあと、瞽女の優情が沙汰され、掟に照らして賞罰が行われます。素行が悪いと修業の年数を削り取る「年落しの刑」に処せられたといえます。

以上が終るとお齋となります。人数が多いので一回に五〇人ほどがお膳につき、幾番膳も出たといえます。初回のお膳には住職や山本ゴイ、各地の主だった年寄りの親方師匠が座り、二番膳からは、誰でも、順繰りに席についたということです。

おもたち

お齋が済むと、今度は弁天様へ唄の奉納があります。紋付を着た山本ゴイと重立の親方四、五人が三味線をそろえて「桜づくし」と「行く春」の二曲を奉納します。これらは、京唄（地唄）で、三味線は本調子、曲は長唄に近く、たいそうめでたい唄であったといえます。

奉納唄が終ると、「座談会」の席となります。妙音講は各地の親方師匠たちが、顔合わせをするので、旅稼業の仲間の組立て、弟子の貸し借り、巡回地、日程など相談する機会となりました。その話し合いが終ると、今度は親方衆が若手瞽女の中から唄上手の者を名指しして、歌わせます。次から次へとはやり唄や民謡が飛び出し、唄の競演となります。唄

の下手な弟子を持つ師匠は、その弟子が名指しされると困るから早々と長岡の町に遊びに出させたといえます。

妙音講の前後には大勢の瞽女が寝泊りするので、布団が間に合わず、布団屋から借りたそうです。瞽女屋からはみだした人は近所の家に泊めてもらったともいいます。瞽女屋の西側を南北に走る道は、通称「瞽女小路」と言われ、妙音講には、露店が出て、終日にぎわいました。つまおり笠や桐油合羽など、瞽女が旅の途中に必要な品を売る店もあって、それを買いました。この機会に旅稼業で傷んだ三味線を直すため、三島屋など長岡の楽器店に預ける瞽女もいました。

長岡は、昭和二十年八月一日夜、米軍機の空襲のより、家屋の大半を失うが、瞽女屋も焼失しました。戦後山本家はブラック住まいで、わずかばかりの瞽女が立ち寄る程度で、組織は崩壊し、妙音講も復活することはありませんでした。最後の山本ゴイは、山本家の

絶えることを憂慮し、近所の世話人の子息を迎え入れて男姓相続を図ったので、今も山本家は存続しております。

平成三年（一九九一）年四月、歴史あるこの長岡瞽女の偉業をたたえるため、有志が集まって、瞽女唄の伝承と普及を図る「瞽女唄ネットワーク」を結成しました。長岡瞽女で、国の無形文化財に選定された小林ハルさんに、弟子入りして、瞽女唄を習得、継承した竹下玲子さんが県内各地で公演を継続して実施する瞽女唄ツアー「瞽女ふたたびの道」を幾年も行い、多くの人々に深い感銘を与えました。

平成七年九月には、瞽女屋山本家の菩提寺であった草生津三丁目の唯敬寺（大いきよと）に会場をお願いし、竹下さんを講師として「瞽女唄教室」を開き、翌八年五月は五〇年ぶりに妙音講を復元して再興しました。竹下さんが四年間指導して横浜に帰られたので、受講生は「越後瞽女唄・葛の葉会」を結成し、瞽女唄ネットワークが主催する定期公演や希望ある所に出

向いて公演活動を展開しています。

瞽女唄ネットワークは、これを全面的に支援し、今後とも越後の伝統芸能である瞽女唄のともしびを消さないように努力してまいる所存です。幾分なりとも長岡瞽女の伝灯を受け継ぐものご理解していただければ幸いです（鈴木昭英記）